

# 慈濟

ものがたり

一杯のご飯がもたらす幸せ

SDGs ~ 慈濟の取り組み ~ 災害をなくし、飢餓をゼロに





●扉の言葉 文・證嚴法師 訳・済運 撮影・黄筱哲

## 智慧のある道を歩む

苦である人生は短く、この世は火宅のようです。

享樂に浸っていれば、

福を削って業を作ることになります。

苦を見て福を知り、愛の心を啓発し、

法を聞いて伝え、福音を広めるのです。

智慧のある道を行んで、共に善行を実践し、

福と慧を修めて、この世に幸福をもたらしましょう。



慈済ボランティアはモザンビークで慈善農耕プロジェクトを推進し、ジョアキム・マラ小学校の貧困児童に温かい食事を提供している。同じような活動は、長年にわたり世界中の慈済拠点で行われており、飢餓に苦しむ家庭を支援しているが、これは国連の持続可能な開発目標（SDGs）2「飢餓をゼロに」にも対応している。



慈済日本サイト

# 目次

【編集者の言葉】

腹八分にして二分で人助け

慈願／訳 4

【今月の特集】 慈済のSDGs

飢餓をゼロに茶碗一杯の幸せ

高雄外国語チーム

食糧不足で起きる災害を防ぐ

日本語組／訳

8

台湾が食べることに困らないように

葉美娥／訳

32

【親と子と教師、三者の本音】

中学生の外出日記

荳荳／訳

37

【特集・能登半島地震】

空き家の足音に心が痛む

済運／訳

42

見舞金に込められた気持ち 確実に届けた

済運／訳

52

【證嚴法師のお諭し】

心は菩薩道から離れない

心嫻／訳

56

【農禪・生活】

菜園から食卓まで

施燕芬／訳

62

新鮮で清らか そして健康な食事

【台湾慈善】

基隆刑務所での歳末祝福会

葉美娥／訳

70

感動を遮るものはない

【グローバル慈善】インドネシア

三十年を振り返る 愛で以て傷を癒す

御山凜／訳

78

【行脚の軌跡】

モザンビークに希望が見えた

済運／訳

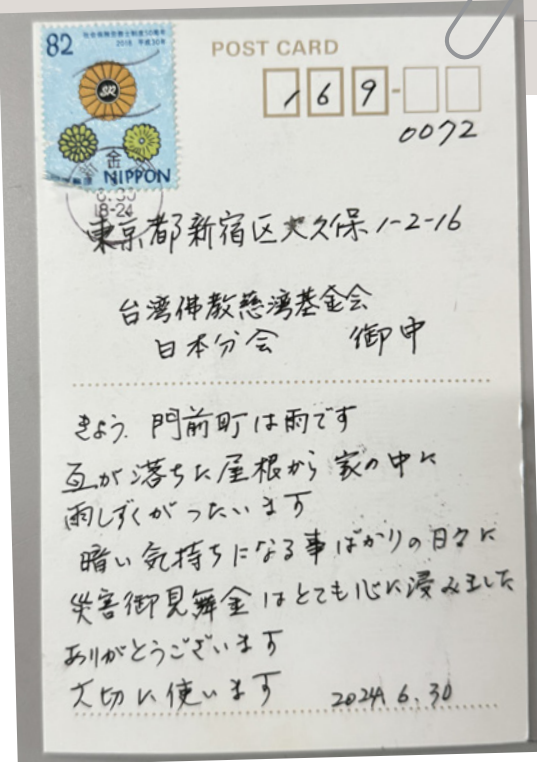
100

九月の出来事

済運／訳

106

## 腹八分にして二分で人助け



七 月中旬、慈濟は能登半島地震被災地において、四回合わせて一万世帯余りへの見舞金配付を終えた。後日、日本在住の慈濟ボランティアが、輪島市の被災者から一枚のハガキを受け取った。(上)

それぞれの家族構成に応じた十三万円から十七万円のお見舞金の源は、全世界の人々の愛から来たものである。更に言えば、もっと貧しく不毛な地域の人々も、日々蓄えていた小銭で能登の復興に手を差し伸べているのだ。今回は市や町の公務員の協力の下に受取人の確認をした上で、ボランティアから被災者に手渡された。

能登半島の住民の半数近くが六十五歳以上の高齢者で、会場へ見舞金を受け取りに来た人を見ると分かるが、その多くが一人暮らしのお年寄りか老夫婦である。お年寄りたちは被災後も、住み慣れた土地を離れたがらず、損壊した家で暮らし続けている。八十九歳のお爺ちゃんは、子供には彼らの生活があつて、邪魔したくないので、できる限りここに居る、と語っていた。また、八十八歳になる行動が不便なお婆ちゃんは、銀行へ行って現金を引き出したり、手続きしたりするのも容易ではないので、

ここで現金をもらえてとても嬉しいと言っていた。

台湾は間もなく超高齢化社会に突入する。日本と同様、地震と台風が頻繁に襲う上、一人暮らしの比例が高いため、今回の地震被害を鑑みて、台湾でも地域防災に備え、災害レジリエンスの向上に努めなくてはならない。

今月号から、国連の持続可能な開発目標（SDGs）シリーズを報道している。主にSDGs2の「飢餓をゼロに」という糧食問題に焦点を当てている。慈済は長年にわたる国際災害支援の経験から見て、食糧危機の問題は海外の貧困地域に多く発生しており、温かい食事或いは米や食料を配付することで、助けが必要な人が基本的生活を維持できるように支援している。長期的には、農作物の種子を農民或いは地域ボランティアに提供して自給自足を促しており、農民に余力があれば、助けられる側から助ける側になることを願っている。

ミャンマーの貧しい農民は、慈済の縁起である「竹筒歲月」の話を知くと、同じような取り組みを始めた。彼らは毎日一握りの米を「米貯金箱」に入れて、人助けをしている。この義挙は上人が呼びかけた「腹八分にして、二分で人助け」に応えたものだ。互いに愛の心で助け合い、人間（じんかん）に善の効果をもたらすようにと願っている。

たとえ、経済的に困難であっても、社会が平穏であれば、人も自分も助け合って、飢餓の問題を無くすことができるのだ。もし、社会が乱れ、外部からの支援が困難になれば、もっと辛く苦しい日々を過ごさなければならなくなる。近年はインフレによって支援物資も値上がりしており、慈善支援も困難を増している。このような時こそ、一人ひとりが小銭で大善を行い、僅かでも蓄積して功德無量にしていく必要がある。

（慈済月刊六九三期より）

# 飢餓をゼロに 茶碗一杯の幸せ

慈済のSDGS

2019年春、サイクロン・  
イタイが東アフリカ3国を  
襲った。モザンビーク・ソ  
ファラ州のテントエリア  
で、慈善組織の炊き出しを  
子どもたちが待っていた。  
(撮影・蕭耀華)

異常気象、地域間の衝突、インフレの深刻化によって食糧不足のリスクが増大しつつある。命を守るための食料援助など慈善支援は、万難を排して行わなければならない。食に余裕が出るようになれば、「腹八分にして二分で人助け」することも、より多くの人を飢餓から救うこともできる。

SDGsの  
対象領域



【慈濟の活動×SDGs】シリーズ

# 食糧不足で起きる災害を防ぐ

文・葉子豪 訳・高雄外国語チーム日本語組

## 国

連が初めて「気候変動による飢饉」と位置づけた国が、アフリカ南部のインド洋に浮かぶ島国マダガスカルである。マダガスカルは四年間続いた干ばつによって農作物が不作になった。その上、二〇二二年一月下旬から立て続けに四つのサイクロンに襲われ、その規模も頻度も過去の平均値を上まわっていたため、被害はさらに広がった。

飢饉はどれほど深刻だったのか。現地人は生き延びるためにイナゴを捕まえ、野生のサボテンを食べたりして空腹を満たし、靴を作るための革まで煮て食べたが、飢饉は深刻化する一方だった。乳飲み子を抱えた母親は栄養不足で母乳

が出ず、産着にくるまれた赤ちゃんは痩せ細って骨と皮だけになっていった。マダガスカルでは何万という人が餓死寸前になった。

国連の持続可能な開発目標（SDGs）の十七項目のうち、「貧困をなくそう」に続いて二番目に挙げられているのが「飢餓をゼロに」である。現在の世界の食料事情を見ると、八十億の人口のうち六割の約五十億人が十分な食料を得ている一方、依然として極めて深刻な飢餓が存在している。

国連の統計によると、二〇二二年現在、世界で二十四億人が重度または中程度の食料不安にあり、七億三千五百万人が慢



●気候変動により壊滅的な飢餓に直面しているマダガスカル。子どもたちは深刻な栄養不良に陥っている。(写真提供・慈済基金会)

性的な食糧不足に直面している。また、気候変動が深刻化し、戦争や武装衝突が多発するにつれ、食糧不足を背景とした人道危機は今後ますます深刻化すると見られている。

## 延べ千七百万人が 台湾米の支援を受けた

マダガスカルにおいて、慈済基金会は現地のライオンズクラブと共同で食料支援を行った。二〇二二年四月には南部のマナンジャリ (Mananjary) 地域の四集落で千四百六十世帯に食料と日用品セツ

トを配付した。慈済にとっては初めてのマダガスカルでの活動で、SDGsの「飢餓をゼロに」の目標に対応している、積極的な取り組みでもあった。

二〇二三年、船でマダガスカル島に到着した百二十トンの台湾産白米は、三日間かけて泥道を揺られ、カヌーに積まれて南東部と南部へ運ばれた後、計十回の配付によって四千九百七十三世帯の二万五千人に手渡された。

四十度を超える灼熱の太陽の下、憔悴した住民の頬に笑みが浮かんだ。女性たちは二十キロの米と栄養補給セット、とうもろこし、ピーナッツ等を頭に載せ、



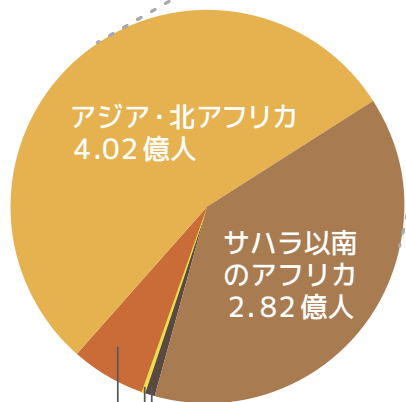
# 世界の飢餓人口

アジア・北アフリカが55%、  
サハラ以南のアフリカが  
38%以上を占める

世界の人口80億人

食料不安がない/  
軽～中度の食料不安：  
72.4億人

飢餓人口：7.35億人



北米・ヨーロッパ 報告なし

オセアニア 300万人

中南米・カリブ地域 4,300万人

数時間歩いて帰宅するのも厭わなかった。何しろ、ようやく食料が手に入ったのだから。配付を取り切ったライオンズクラブ副会長のユージニーさんは、住民に物資の由来を説明すると共に、彼らに合掌を教え、遠い島からこの島に手を差し伸べてくれた支援者に「慈済の皆さん、ありがとうございます！」と感謝した。

マダガスカルでは、二千八百万余りの人口のうち七割が貧困線を下回っている。慈済ではその後も食料支援を継続し、今年には二百四十トンの台湾米を贈る予定だ。

「台湾政府農業部農業署がこれまで二十一年間にわたり愛の米を提供してく

ださったおかげで、途上国の被災者や貧しい人々に生きる希望を与えることができました」。国際援助事務を統括する慈済基金会の熊士民（シオン・スーミン）副執行長が、政府の備蓄米を利用した国際援助の成果について説明した。

台湾政府が、国際支援を行う民間団体を対象に備蓄米の無償申請を開放して以来、慈済は二〇〇三年から二〇二三年までに十五万四千トン余りの台湾米の輸出を申請し、国連により中程度から最悪レベルの食糧危機リスク国と位置づけられている十七カ国を含む計二十カ国の、延べ千七百八十九万人に届けた。



● 慈済を通じて台湾愛心米がマダガスカル（右の写真 撮影・藍祥佑）、モザンビーク（左上の写真 撮影・蕭耀華）など20カ国に届けられた。また、2003年、インドネシアにて慈済は初めて政府の備蓄穀物による食糧援助を行った。2011年、ジャカルタでの愛心米配付の際、お年寄りに代わって愛心米を運ぶ慈済青年ボランティアのメンバー。（左下の写真 撮影・チャンドラ・ウィジャヤ）



二〇二四年に慈済が申請した備蓄米は、アフリカと中米を合わせた十の国と地域に届けられる予定だ。中米の支援対象国のうち、最も状況が深刻なのは、武装組織による暴力事件が多発しているハイチだ。慈済では貧しい人々の手に無事に食糧が届くよう、以前より提携関係にある現地の台湾企業を通じ、軍や警察、政府機関の協力を得て通関から配付までの日数をできるだけ短縮し、順調に配付できるように図っている。

「これまでにアフリカ五十五カ国中、三十六カ国で支援を行っており、現在も十三カ国で継続的に支援を行って

この際の支援物資はアフリカ現地で調達したものである。

### 種粃を提供して農耕再開を支援

SDGsの目標2「飢餓をゼロに」のターゲットには、全ての人が一年中安全かつ栄養のある食料を十分得られるようにすること、栄養不良を解消すること、また食料の生産性を上げ、小規模食料生産者の所得を増加させることなど、持続可能な農業に関する項目が含まれている。食糧不足や食料価格の高騰に直面している国々にとって、食料援助は飢餓を

ます」と話すのは、慈済基金会宗教処海外慈善チームの楊琇光（ヤン・シユウグアン）さんだ。海外支援は現地の文化に沿って、輸送による環境負荷を考慮し、近年では支援物資に現地調達の割合を増やしているという。

例えば、慈済が三十年以上にわたって支援を行ってきた東アフリカのエチオピアでは、一億二千万の人口のうち三百万人が内戦や干ばつにより難民となっており、慈済は二〇二二年から難民に食料セットを配付し、二〇二三年五月にはキミア協会（KIMIA MAHIBER）と協力して、南部の干ばつ被害地を支援したが、

緩和する恵みの雨ではあるが、それだけでなく、地元の食料自給率を高め、農業生産力を維持することで、食料危機へのレジリエンスを強化することも可能だ。

慈済では食料の緊急支援に加え、現地の条件やニーズに沿って、種や肥料、灌漑設備などで農耕の再開を支援している。熊副執行長は、「慈済は地域の環境や生活文化、気候風土が農耕に適しているかどうかを丹念に調査しています。農村であれば当然農業の方面からアプローチすることになります」と簡潔に説明した。話は一九九一年に遡るが、慈済が最初

に中国華東大水害の災害支援をした時、證嚴法師は災害支援チームに、食料支援に加え、農民に種籾を提供するよう指示した。実った米は食料になるだけでなく、翌年の種にもなるのだ。

一九九四年にカンボジア西部が干ばつと洪水災害に見舞われた際は、米や穀物の種その他、百台余りの給水ポンプを各被災地に送り、川の水や溜まり水を汲み上げて、涸田を灌漑することで、田植えに間に合わせた。ポンプや種の支援は、被災地の農業再生につながったことから、一九九五年四月、カンボジア内政部副大臣の何速將軍が復興した農地で収穫された米を携えて静思精舎を訪れ、支援を受

けた農民に代わって謝意を伝えた。

また、二〇〇〇年以降に行われた国際災害支援のうち、二〇〇八年にサイクロン・ナルギスに襲われたミャンマーに対するその後の農業再生および農村活性化は、飢餓や貧困の解消におけるモデルケースと言えるだろう。

慈済ミャンマー連絡所現責任者の李金

● 飢餓をなくすための取り組みの1つに、農村における食料生産力の向上がある。慈済は多数の国において、種子の提供や灌漑設備支援といった災害後の農耕再開を支援している（上の写真 撮影・蕭耀華）。2023年10月、大洪水が起きたミャンマー中部。今年2月、慈済は被災地のオツカンで施肥の時期に間に合うよう肥料を配付した。慈済から肥料を受け取る農民（下の写真 撮影・パイオ・パイエ・アウン）。



蘭（リー・ジンラン）さんは、災害後の被害調査時の光景を今も忘れられないと言う。被災した農村は一面の廃墟と化し、生き残った農民たちは家も耕牛も失い、農地さえも高潮による塩害を受けていた。海外からの資金援助がなければ、農民たちは土地売却の波に巻き込まれていたはずだ。幸い慈済がすぐに早熟の種籾や肥料を無償で提供したので、農民たちは、被災と借金の一重苦に陥ることなく、農地を再生し、故郷を復興することができた。

慈済人は災害調査と物資の配付を同時に行い、村人たちに「一日に五十銭を貯

めて善を行う」という慈済の「竹筒歲月」の精神を紹介した。しかし、農民の生活は苦しく、貯金する余裕などない。その時、農民の一人が「代わりに毎日一つかみの米を貯めてはどうか」と提案した。こうしてミャンマー特有の「米貯金箱」が誕生したのである。

「一つかみの米で人助けができると聞いて、それなら簡単だと感じたのでしよう。村のほとんどの人がこの活動に参加してくれたのです。集まった米で村の貧しい人を助けることができました。農民自身だけでなく、より貧しい人たちも食料不足を免れたのです」と李さんが言った。

## 二千人で農業用水を運ぶ

「米貯金箱」活動を通じて、ミャンマーの村人たちの間には「腹八分にして二分で人助け」という考え方が広まり、貧富にかかわらず善行するようになった。また、慈済人は人種、文化、食習慣の全く異なるアフリカでも菜園や農場を開拓し、その収穫でより支援を必要としている人々を助けている。

例えば、東アフリカのモザンビークでは、二〇一九年のサイクロン・イダイ被害の後、現地の慈済ボランティアは首都で行われていた農耕による支援方式を中

部の被災地ソファアラ州ニヤマタンダ郡メトウシラに広げた。メトウシラの「大愛農場」は当初たったの二ヘクタールしかなかったが、それにもかかわらず、千人以上が自発的に慈善農耕に参加してくれた。用水路が整備されていないモザンビークでは、農地に撒く水は人力で運ばなければならず、高齢で水を運べない農民も少なくないため、彼らは無償で土地を慈済に貸した。慈済モザンビーク連絡所責任者の蔡岱霖（ツァイ・ダイリン）さんは、「ニヤマタンダ郡では二千人余りのボランティアが水汲みネットワークを作り、井戸や川で水を汲んでは農地に撒い



●農耕プロジェクトを通じて自ら収穫したとうもろこし粉を頭に載せ、南アフリカのポランティヤとともに貧しい家を訪問するマラウイの村人（左の写真）。現地の多くの村で慈済が贈った種が使われ（右の写真）、収穫は慈善活動に充てられる。（撮影・袁亜棋）



## 飢餓ゼロに向けた 慈済の活動

### ●被災した農地の再生

ミャンマー、カンボジア、フィリピン、中国、レソト、ザンビア、モザンビーク、スリランカなどで種、肥料、灌漑設備などを提供。

### ●食料援助

世界68の国と地域に連絡所を設け、日常の貧困救済と緊急物資配付を実施。

長年にわたり、食料危機の程度から最悪レベルにある17カ

国を含む計20の国と地域に台湾愛心米を援助。

### ●炊き出し場所の設置

南アフリカ、モザンビーク、エスワティニ、ジンバブエ、ハイチ等で、地域の貧しい人や病気の人、身寄りのないお年寄りなどに食事を提供。

### ●栄養の改善

インド、モザンビーク、インドネシア等でBMIが低すぎる貧困者や子どもを対象に、栄養補助食品の配付や定期検診を実施。

てくれます。本当に多くの人が力を合わせています」と賞賛を込めて言った。

「大愛農場」では野菜や果物が豊かに実っている。アフリカ人にとって欠かせない主食のとうもろこし以外に、かぼちゃ、トマト、さつまいもの葉などビタミンが豊富な野菜類もあり、大きなピーナッツはタンパク質や油脂の重要な供給源である。

元々は貧しい人々を助けるために開拓された農場だったが、予想外だったのは、二〇二〇年四月以降、新型コロナウイルスの流行によって全国が緊急事態に突入したことだ。都市でロックダウンが開始され、仕事がなくなった人々は故郷に帰る他な

かった。メトウシラの大愛農場で栽培された野菜や果物は、折良く帰郷者の生活を支えるのに役立つたのである。

「今年から新たに十六ヘクタールでとうもろこしの栽培が始まりました。これは初めての主食用作物の大規模栽培になります。収穫は売り物になるのではなく、とうもろこし粉にして小学生の給食にすることを、農場ボランティアたちは皆知っています」と蔡さんは説明した。

ニヤマタンダ郡には慈済の支援で建設されたホアキン・マラ小学校がある。この小学校では、貧しい家庭の子どもたちはお腹が空いて授業に集中できず、学校

を休むことも多かったという。

「去年から温かい給食の提供を始め、今年は週二回に増やしました。大愛農場の収穫だけでは五百人以上の児童の給食の半分にしかならず、残りは依然として台湾の愛心米に頼っています。自給自足を目指して頑張ります」と蔡さんは誓った。

## 一粒のとうもろこしが命を救う

アフリカ最南端、南アフリカ共和国のダーバン市では、現地ボランティアが各地区に設けられた二百カ所余りの炊き出

し場所で、孤児やお年寄りなどに温かい食事を提供している他、大愛菜園も運営している。

「私たちは現地ボランティアを通じ、援助を待つのではなく自分たちで動くよう地域に働きかけています。努力さえすれば自力で野菜の栽培ができるだけでなく、他の人に分け与えることもできるのです」。

こう語るのはダーバン市在住の慈済ボランティア袁亜棋（ユエン・ヤーチー）さんだ。菜園の普及状況に関しては「正直に言ってしまうような成果は出ていない」と袁さんは言う。周辺の国に比べて



経済状況の比較的良好な南アフリカでは、低所得者は政府や慈善団体から支援を受けられる。長い間、支援を受け続けてきた彼らは「援助依存」に陥っていたのである。地域の若者たちに働きかけることができなかつたので、現地の中高年女性ボランテアたちが慈済青年ボランテアと共に畑を耕し、採れた野菜や「愛心米（支援米）」で炊き出しを維持している。

「全ての地区が自力で農業を営むようになってほしいと思います。そうすれば、援助依存を断ち切ることが出来ます。現地ボランテアには、これこそが證嚴法

師の精神であり、精舎の師父たちが『一日働かねば、一日食せず』の精神の下、農業や手工業で生計を立て、さらに人助けをしたのが慈済の起源なのだと話しています。この精神が伝わることを願っています」と袁さんは気持ちを込めて懇ろに語った。

この精神は同じアフリカの国マラウイに伝わった。慈済の呼びかけに応じ、ブランタイア市では七集落の農民五十人が

●慈済の支援で建設されたモザンビークのホアキン・マラ小学校。現地慈済ボランテアと学校側が協力し、農場の収穫と台湾愛心米を使って温かい食事を提供する「給食プロジェクト」に取り組んでいる。（写真提供・モザンビーク連絡所）



農耕プロジェクトに参加してくれた。慈濟はとうもろこしや大豆の種を提供し、彼らの自立を支援した。

六十歳のアニーさんは二〇一九年に慈濟に加わった。彼女は一・五ヘクタールの農地を持つっており、とうもろこしを栽培していたが、今年はエルニーニョ現象による雨不足で、たったの三百五十キロしか収穫できなかった。それにもかかわらず、彼女はのうち百キロを寄付したのである。心配したボランティアは「ただでさえ少ない収穫を寄付してしまつて、生活は大丈夫なのですか」と尋ねた。

「慈濟がくれた種がなければ、今、私  
梓組条約第二十八回締約国会議において  
食料問題が初めて焦点となった。また、  
今年六月ドイツで開かれたCOP29の  
事前ミーティングでは、食料システムの  
転換を年末に開かれる大会の重要議題と  
することが確認された。この先、飢餓を  
なくし、持続可能な方法で世界の人口を  
支えるためには、食料生産量を増やすと  
同時に二酸化炭素の排出量を削減し、地  
球の気温上昇を一・五度以下に抑えなけ  
ればならない。

壊滅的な飢餓を防止する唯一の解決策  
というものはない。とはいえ、自給力の  
回復、持続可能な農業の普及発展、食品

たちの手には何もなかったでしょう。私  
はもう必要なだけ持っています。です  
から、感謝の心で、この愛をより多くの人  
にシェアしたいのです」。

アニーさんも、また同じくとうもろこ  
しを寄付した現地ボランティアのステラ  
さんも、異口同音にこう答えたのであつ  
た。おしなべて貧しいこの地域で、この  
愛はより多くの人を飢餓から救っている。

### 食料システムの転換で 全人類を救う

二〇二三年、COP28国連気候変動  
ロスの削減が解決の鍵と言えるだろう。  
慈濟では長年にわたり、貧困による食料  
不足に直面している国や深刻な災害が発  
生した国に対し、食料支援を行ってきた。  
まず被災者の生存を確保し、その後も飢  
餓の緩和と持続的な食料確保を目指し、  
長期的に農地再生を支援している。

これは法師のおっしゃる「種は何世代  
にもわたり収穫をもたらす。愛も、幾年  
月と続いて永遠に尽きることはない」と  
いう言葉の通りだ。物資が尽きることは  
あっても、人を思いやるこの愛は、尽き  
ることはないのである。

(慈濟月刊六九三期より)

# 台湾が食べることには困らないように

農業生産は、商品作物だけに焦点を当てて  
主食や雑穀を無視してはならない。  
食糧の自給率を維持、アップすることで、  
災害や疫病などの予測不可能な事態に陥った時、  
回復力を高めることができるのである。

す

すべての袋に「台湾からの愛」と印刷された台湾白米は、アフリカや中南米で支援を受けた人々を笑顔にしている。しかし、米による海外支援という

慈善活動の背後には、無視してはならない食糧安全保障問題がある。

台湾の農業部の統計によると、台湾の食糧自給率は僅か三割に過ぎない。では、

なぜ毎年海外支援に十分な量の米が蓄えられているのだろうか。

答えは大衆の日常生活にあるという。

「一九八〇年代には一人当たり年間九十八キロの白米を消費していましたが、二〇二二年には四十三キログラムまで減少しています」。農業部農糧署稻作産業課の楊敏宗（ヤン・ミンゾン）副科長は、大衆の食生活の変化によって、台湾の米消費量は過去と比べて大幅に減少していると説明した。二〇〇二年に台湾は世界貿易機関（WTO）に加盟し、日本、タイ、アメリカなどからの「輸入米」も市場に出回るようになった。政府は食糧安全保障を考えると共に、農民の収入を

確保して米の生産量を維持するため、「保証価格」によって米を買取るだけでなく、緊急事態に備えて一定量の米を備蓄しているのである。

楊副科長の話によると、現在、台湾の月平均米消費量は約十万吨（玄米ベース換算）で、政府は最低三カ月分の「安全在庫」、即ち三十万トンを備蓄しなければならぬ。現在の台湾における米の生産は供給過剰で、備蓄量が安全在庫量の基準を上回っているため、慈濟など慈善団体が政府に公的食糧の海外支援を申請し、申請者が輸出入作業と輸送費を負担して海上輸送で各国に運び、飢餓や貧困に苦しむ人々を助けることができ



る。それは台湾と海外の間に友好関係を築くだけでなく、備蓄米の利用効率を最大限に発揮することにもつながる。

食糧安全備蓄は量以外に、食糧自給率を確保し、台湾の農業生産パワーを維持することで、災害や疫病などの予測不可能な状況に直面した時、より高い回復力を示すことができるのである。

「例えば、アフリカの一部の国は、コーヒーやココアの産地ですが、常に食糧が不足しています」と、慈済大学サステナビリティと防災学科の邱奕儒（チュウ・イール）主任が言った。農業の発展は自給自足を第一の目標とすべきだが、多くの開発途上国が食糧危機に陥っている

のは、まさに農業生産が自給自足のためではなく、輸出して外貨を獲得する手段となったことが原因である。

「彼らの論理は、現金を稼げる商品作物を輸出し、稼いだお金で、国際市場で食糧を買う、というものです。しかし、国際食料価格は常に変動し、商品作物の価格も安定していません。もし、商品作物の価格が下落すれば、収入が減り、十分な食糧が買えなくなるのです」。

邱主任の説明によれば、自由貿易においては、少数の主要穀物生産国が、低価格の農産物を世界中で販売し、世界中の小規模農家の生存空間を圧迫しているため、多くの国では農家が廃業し、田

畑は休耕状態になり、食糧の自給率が下がって、食糧危機のリスクが高まっているのである。更に、広大な土地を開墾して、単一の作物を植えるために、大量の農薬や化学肥料を使用するため、土地は徐々に痩せ、農業生産は回復力を失ってしまう。

今世界的な「食糧の商品化、生産の集中化」から派生した危機に対して、人々は「食べること」で食糧自給率を維持することができるのだ。つまり、地元でと

レント王国は2023年、干ばつと凶作に見舞われた。民衆は、食糧不足の窮状を緩和するために、遠くから慈済ボランティアが配付した台湾の愛の米を受け取りに来た。（写真提供・慈済基金会）

れた米や野菜などの農産物をより多く食べることである。

国立台湾大学農業経済学部の雷立芬（レイ・リーフェン）教授は、友好国のパラオを例に挙げて、食糧自給率の重要性を説明した。パラオの主食は、元々タロ芋だったが、日本とアメリカの統治時代に米が入ってきて、人々は米を食べるようになった。しかし、パラオでは米は生産していないので、アメリカのカリフォルニアから輸入されている。コロナ禍の間、海上運送が影響を受けて、米が輸入できなくなり、食糧不足に陥りそうになったが、幸いなことに、台湾が適時に支援

米を提供し、この小さな島の二万人の住民は、食糧危機を避けることができた。

「食べ物がなければ想像もつかないでしょう」と雷教授は指摘した。「農業生産を維持することは、即ち私たちの生態系を守ることなのです。天候不順で、世界中で食糧不足になった場合、台湾はどこで食糧を買えばいいのでしょうか。ですから、食糧自給率を維持するのは、非常に重要なことで、自分たち自身の農業を持つことです。米を食べる気があるなら、少なくとも台湾ではご飯が食べられるのです」。（慈済月刊六九三期より）

親と子と教師、三者の本音

◎文・李秋月（高雄区慈濟教師懇親会ボランティア）挿絵・鍾庭嘉

訳・荳荳

## 中学生の外出日記

### 問

中学生は、大人の付き添い無しで、グループで外出してもいいでしょうか。

答・この質問を聞くと、私の中学生時代を思い出します。

休日になると、仲の良い男女同級生数人を誘って「手作り土窯焼き」に行っていました。サツマイモや落花生など、畑の持ち主が不要となった作物を主食

にしたり、中秋節には、同級生数人と街に出て爆竹を鳴らし、空いっぱいสีสันやかな花火を打ち上げたりしました。こんな楽しいお出かけの思い出は、今でも忘れられません。

当時、同級生の親たちは、子どもた

ちが誰とどこへ行き、何をしに行くのかが分かっていたので、とても安心して子どもたちを外出させることができました。

どの世代にも直面する課題はありますが、一緒に出かける同級生は誰なのか、行き先はどこなのか、こうした疑問は起こるものです。

### 同行者を確認する

中学生の保護者は、子どもが友達と一緒に出かける場合、心配になるもの

です。誰と一緒に行くのか、行き先は安全か、交通手段はどうするのか、これら全ては出かける前に確認することができません。確認したならば、保護者や養育者は安心して行かせるべきです。

私の親友Lの息子さんは、現在技術エンジニア兼廟の修復師です。それは彼が中学生の頃、或る廟の修復師が技術を若者に伝授したいと思い、村の中学生を招いて寺院を訪れ、解説したことがきっかけでした。暫くすると、その中学生たちは誘い合って台湾

中の寺を巡って、各地の有名な廟修復師と知り合い、やがて簡単な修復作業に参加するようになりまし。Lの息子さんは今では廟修復師の免許を持っています。

「最初は、子どもたちに勉強ばかりでなく、外の世界を見れば学



校生活の憂鬱も晴れるだろうと考えただけでしたが、そのことがきっかけで、子どもたちが幅広い人生を歩むことになると思ってもいませんでした」とLは語ってくれました。

## 安全に注意することを学んだ

今、台湾の教育現場では、子どもの睡眠時間を確保するためや、通学途中の安全を考慮して、子供に自転車や一人徒歩で通学させない親や保護者が多く、小学校六年間と中学高校六年間を通して送り迎えするという状況になっています。十八歳になって大学に進学するとバイクを購入してあげるのですが、自転車にも乗ったことがない我が子が交通事故を起こさないかということとは、考えないのです。

を学べば、グループで外出する時、自分の安全にも一層注意を払うようになります。

## 未知への探求を奨励する

親や保護者が、出かける相手と行き先を確かめたいのであれば、目的地に着いたらケータイをカメラモードにしてもらって、一緒にいる人全員にカメラを通して挨拶したらいいでしょう。または、旅先の目印を映してもらえば、社会事件になるのを防ぐことができます。

ネット上でこんな話を見かけました。「実務経験の伴わない知識は、鶏を操る能力のない書生のようなもので、多くのことを知っていても、実際に実践した経験がないのです。紙上の空論で偉そうなことを言っても、実行する能力がなければ、長平の戦いで四十万の趙軍が最終的に秦に負けたようなことになるのです」。

親や保護者は、徐々に子どもの手を離し、小学校から徒歩通学させ、中学では自転車やバスでの通学をさせてみるべきです。日常生活でライフスキル

年若い子供は未知のものに対して好奇心が旺盛なので、子どもが友達と出かけたと言った時は、新しいことに挑戦する好奇心を失わせないためにも、反対しないようにしましょう。

Lのお子さんがそうであったように、お子さんに自分の得意分野を発見させ、それを特技に育て、経験から学ぶ姿勢と健全な成長マインドを持たせれば、必ずや将来の世界は広がっていくはずです。それは、仲間と出かけることから始まるのです。

(慈済月刊六九一期より)

## 空き家の足音に心が痛む



●能登半島地震から9カ月が経ったが、多くの損壊した家屋は未だ解体待ちの状態にある。多くの高齢者は時折、我が家に戻って、柱に刻まれた子供たちの成長の跡をなぞったりして、幸せだった日々を思い出したりしながら、再び前へ進む勇氣を得ようとしている。

文と撮影・潘静涵（慈濟基金会宗教所）  
訳・済運

八月二十九日、台湾から来た私たちが小松空港に降り立ち、日本の慈

濟ボランティアと合流し、翌日から、能登半島地震の見舞金配付を開始する準備を行なった。五月から七月までに四回の配付活動を終え、この五回目の配付は主に七尾市の被災者を対象としている。加えて中能登町、輪島市、珠洲市、志賀町

で配付条件は満たしているが、まだ受け取っていない一部の住民も対象となる。

三日間の配付活動は、午前九時から午後四時までだったが、早朝の六時にもならないうちに、会場に来て並んで待つ住民がいた。初日は二千百世帯余りが受け取ったが、これは予測総数の六割を占めた。多くのボランティアは水を飲む時間もないほど忙しかったが、皆、住民を長く待たせたくないという共通の思いがあった。

これまで日本語を学ぶ時や日本人と交流した経験の中から、日本の社会には「内」と「外」の文化があり、個々の家庭と会社またはコミュニティに区別され

ていることを知っていた。しかし、七尾市の住民たちは、遠くから配付に来てくれた慈済ボランティアに感謝し、また竹筒歲月の話を聞いた後は、こぞって財布から硬貨や紙幣を取り出し、人助けのために竹筒に入れた。その中の田本泰一郎さんは涙を流しながら、「大衆の小さな力を合わせてこそ、愛と善の心を伝えて行くことができ、世界は平和で調和の取れた世界になるのです」と言った。

六十八歳の高岡園子さんは、ボランティアベストを着て、慈済ボランティアが説明してくれた「慈済の行動様式」を引き継いだ。「一円じゃなく、五十銭で

も善行ができるのです。信じられますか?」。彼女自身も被災者だが、もっと多くの人に「一日一善」を知ってもらい、愛が循環するよう期待している。

見舞金を受け取った何人かの女性は翌日も続いていた慈済の配付活動に、急いでいっぱいの小銭を持って来て、寄付した。実は、その小銭は、日頃の買い物のお釣りが、月日が経つにつれて貯まったもので、かなりの量になっていた。正に慈済の初期に三十人の主婦が五十銭の買い物のお金を節約して竹筒に入れていたように、「小銭で大きな善行をする」という行為が、時空を超えて受け継がれたのだ。

## 晩年になつて無常に遭遇した

五十八歳の辻井明弘さんは、八十歳の母親に代わって見舞金を受け取りに来たが、翌日になんと四つの大きな袋に入った小銭を持って現れた。それは地震の後、自宅を片付けていた時にかき集めたもので、彼はそれを全て寄付することにした。

私たちは、大愛テレビの記者と一緒に彼の家を訪ね、被害状況を詳しく聞いた。辻井さんは大変気さくな人で、一つひとつの部屋の損傷状況を滔々と説明してくれた。家の片付けは終わっていたが、地震当時の揺れがどれだけ激しかったかを

感じ取ることができた。彼の家は居住不可と判断され、目下、国の公費解体を申請している最中である。彼は足場工事の仕事をしていたため、この解体工事にも参加したいと考えており、それはこの古い家に対する感謝の気持ちと愛着を表していた。

今年八十歳で、陸上自衛隊に約三十年間勤務した白瀬政一さんは、私たちが一緒に彼の家を見に行くことに同意してくれた。彼は戦争孤児で、生年月日も分からないが、親切な人に育てられたと言う。三十五年前、奥さんと貯金で二階建ての家を建て、生涯をここで過ごすつも



## 能登半島地震、慈済の支援

- 2024 年元旦、石川県能登半島でマグニチュード **7.6** の地震が発生し、**8** 万棟の家屋が損壊した。
- 緊急支援を要した期間、東京や大阪などの慈済ボランティアが被災地である穴水町で、炊き出しを行った。また、穴水総合病院に臨時の慈済カフェを設け、地域住民や医療従事者に心の安らぎを与える支援を提供した。
- 5 月半ばから 9 月初めにかけて、**34** 会場において行われた **5** 回の活動で、能登半島の **4** 町 **3** 市の **15,314** 世帯に見舞金を配付した。
- 配付対象は地震で家が半壊以上、且つ 65 歳以上の高齢者が同居する世帯とした。そして、世帯構成に応じて金額を設定した。見舞金は、国際災害支援専用口座から出ている。



りだった。しかし、震災で家は居住不可と判断され、住めなくなってしまう。彼はとても悲しみ、いつそのこと死んでしまった方が、生きて行くよりも楽だとさえ思ったことがある。

今、白瀬さんは仮設住宅に一人で暮らしており、奥さんは娘さんの家で療養中である。人生の晩年に子供や孫たちと楽しく過ごしていた矢先に、このような無常に遭遇した、と言った。部屋の柱にある、子供や孫たちの身長を刻んだ痕は、成長の記録であり、彼が最も諦めきれない思い出でもある。彼はこの二本の柱を新しい家に使いたいと考えていたが、解体手順を聞いた後、諦めるしかなかった。

ために夜行バスを使ったりした。活動全体の企画は若い世代のチームが担い、経験豊かな師姑や師伯たちは指導とサポートをする中で、慈済の次世代へ引き継がれる姿が見られた。

五十一歳の竹下美穂さんは、わざわざ配付会場にボランティアするために来て来た。台湾が大好きだという彼女は、台湾の慈善団体が配付に来るという話を聞いて、親近感を覚え、会場を見に来たいと思った。ボランティアたちの若々しい活気と熱意に感動したと言う。

彼女の家は修繕して住み続けることはできるが、地震で彼女の心境は変わった。石川県は元々地震帯であることは

白瀬さんのその家に対する愛着を感じたが、どうにもならなかった。きつと、多くの住民も彼と同様の思いを抱いているに違いない。家が取り壊される瞬間、それまでの人生を奪われたような気持ちになるだろう。空になった家中を歩く白瀬さんの後ろ姿から、家族みんなで楽しく過ごした日々を思い出している様子がうかがえた。

### 夜行バスで被災地へ

配付活動がある度に、ボランティアは各居住地から駆けつけた。新幹線を利用したり、時間と交通費を節約する

知っていたが、まさかこんな大規模な地震に見舞われるとは思ってもよらなかったという。無常を身近に感じ、自分も被災者の一人になったことを実感したそう。以前は毎日当たり前のよう仕事に追われていたが、今は月に二日しか働かず、生活費を稼ぐためにアルバイトを探さなければならなくなった。政府の失業手当がいつまで続くのか分からないため、少しでも貯蓄を増やしたいと考えている。

能登半島地震から九カ月が経ち、多くの損壊した家屋は未だ解体待ちだが、住民たちのスタンスは変わって来たり、将来の生活に向かって頑張ってい

るように見える。慈済ボランティアは自ら実質的な経済支援を行って来たが、最も重要なのは、住民一人ひとりと顔を合わせ、お茶を飲みながら言葉を交わすことで、お互いに心の支えとなったことである。ある住民は、「慈済ボランティアからたくさんの元気をもらいました。その元気は尽きることがありません」と語った。

### 一期一会、能登の幸せを祈る

私の母方の祖母は日本教育を受けたため、毎晩日本語の歌を歌って幼い私を寝かせてくれたり、小学生の私に日本語の

本を読んで聞かせてくれたりした。中学生の頃、私は日本語に強く興味を持ち、最初は独学で辞書をめくって、一字ずつ習い始めた。社会人になって経済的に余裕が出てからは、積極的に勉強するようになり、数年後、日本語能力検定試験N1を取得するまでになり、日本の大学に進むことができた基準を突破した。

幼い頃、日本語の子守唄が、私の日本文化に対する鍾愛へのきっかけとなった。前回日本に行ったのは、東京と大阪の慈済の会務に関心を寄せるためだったが、もう七年前のことである。今、再び日本を訪れる機会ができ、往路の飛行機

の中で若い頃にひとり旅したことを思い出した。ある時、地下鉄のホームに立って、時間とお金を日本への旅に費やす熱意は、正しいことなのだろうか、と考えたことがある。それからは、そういう旅をすることを止め、生活の重点を慈済の職務と志に置くことにした。

日常、宗教処で多岐にわたった煩雑な海外の慈済事務と向き合って、いつも時間に追われていた。今回の訪問で、「周りとそして自分の心を観察する」という課題を自分に課した。見舞金の配付を通して、日本のボランティアの心遣いと願力によって、世界中から集められた善意

の心が発揮されたことを感じた。それによって、私は「どんなことをしたらいいか。何に貢献できるだろうか」などと自分に対する過度の期待は止め、目の前のことに集中して、心することが最も大切なのだと思った。

見舞金の配付は円満に終了し、中長期的な支援が始まりを告げた。多くの被災住民がボランティアとして参加し、「人傷つけば我痛み、人苦しめば我悲しむ」という精神を学び、内と外の区別を超え、るのを目のあたりにした。そして私も、「二期一会」を大切に、純粋な心に戻り、心から能登を応援したいと思う。

## 見舞金に込められた気持ち 確実に届けた

地震の後、娘や孫たちは儉約した生活を送って、  
損壊した家の再建に頑張ってくれています。

見舞金を受け取ったので、彼女らを連れて美味しいものを食べて、  
幸せな時間を過ごしたいと思います。

残りは家の修理のために貯金します。

台湾の慈済からいただいた、心温まるご支援に感謝しています。

● 厳冬期に地震が起き、家が半壊した水谷育子さんは、直ちに自宅で温かい食事を作って、近所の人に届けた。見舞金を受け取ると、竹筒貯金箱を持ち帰り、孫たちと一緒に善行して慈済にお返しをしたと言った。



私は水谷育子です。年は六十六歳です。国民年金で生活しています。数年前、娘と三人の孫と一緒に小さな家を建てましたが、今年の能登半島地震で家が半壊してしまいました。

私たちが住んでいるのは古い住宅街で、多くの家は古い土壁造りですが、地震ですぐに倒壊してしまいました。幸い、私の家は一部が無事だったので、温かいスープとお握りを作ることができました。そして夫々の家で避難生活をしてきた近所の独り暮らしのお年寄りたちに配りました。

あの時はまだとても寒く、温かい食べ物で心まで温まったという言葉が頂きました。その言葉に私も励まされ、その温かさを七尾市の田鶴浜高校の避難所に届けました。被災後までもない援助ができて、皆さんにも喜んでもらいました。

余震が続いていた関係で、私たちは暫くの間、車の中で寝泊まりしていました。八月末になった今でも、いつでも避難できるように、身の回り品を持ち歩いています。地震が起きた時にとっても怖い思いをしたので、万全の

準備をするようになりました。

最初に台湾の慈善団体が見舞金の配付に来ると聞いた時は信じられず、詐欺か何かと思いました。その後、各方面に確認して、やっと本当だと分かり、今日は感謝の気持ちで受け取りにきました。台湾も四月に地震被害に遭われたのに、私たちの支援に来てくださり、とても感動しています。

家の修理には非常に多くのお金がかかるので、あちこちから集めた補助金を充てています。生活は決して豊かではありませんが、今日頂いた心温まる見舞金は、娘や孫たちを労る意味で少し使わせていただきたいと思います。長い間、家の修理のために生活を切り詰めて頑張ってくれたので、美味しいものを食べさせて、幸せな時間を過ごそうと思っています。残りは家の修理費に貯金します。

「竹筒歲月」のお話を伺って、私も竹筒を持ち帰りました。孫たちに、毎日善の心を育て、台湾の慈濟から頂いたとても意義のある祝福にお返しをするようにと話して聞かせています。（慈濟月刊六九五期より）

## 心は菩薩道から離れない



菩薩になれるよう  
学びましょう。

聞こえて

目にすることができれば、  
助けることができるのです。

広く見聞きして、

世の苦難に心を寄せ、

心が菩薩道から

離れないよう、

行動しましょう。

## 近

頃の気候は正に異常と言えます。  
国際的に高温で人が亡くなる報  
道をよく目にします。また、こんなに  
強い日差しの下で、トタン屋根の家に  
住んでいる多くの貧しい人は、まるで  
ストーブに放り込まれたかのように、  
耐え難い地獄にいる気分の違いありま  
せん。

世の中の裕福で幸せな家庭では、子  
供たちは常に大切にされ、可愛がられ  
ていますが、一方、貧困、病、苦難に  
満ちた人生もあるのです。「苦」とい  
うのは言葉で表わせることなく、日々  
の実生活は哀れなものです。しかし、

私たちは幸いにも、人間（じんかん）  
菩薩がこの時代に湧き出ているのを目  
にしています。

菩薩の心で、世の衆生の苦しみに関  
心を寄せるのです。心に愛があれば、  
自然と多くの助けを必要とする人と接  
することができます。人間（じんかん）  
に苦しみが多いのは、人心が複雑になっ  
ているからで、災いを作り出している  
だけでなく、気候変動による災難もも  
たらしているのです。世界に苦難があ  
れば、慈済人は心して、愛で以って、  
あらゆる国や地域で、リレー式に支援  
しています。私はこの大いなる因縁を

大切にしていると同時に、とても感謝し、感動しています。しかし、「世の中にはこのような苦しみがどれだけあるのだろうか」とも思ってしまう。私たちの力はとても微弱なのです。

苦しみの無い場所など無いと言われますが、それでも私たちは苦しんでいる人を助けるためにできる限り尽くし、少しでも多く奉仕しなければなりません。決して自分の力が微弱だから何もできないと思わないでください。少しずつ積み重なれば、大きな力になり、広く奉仕できるのです。もし、慈濟が初期の頃、助けを必要とする人を目に

しなかつたら、発心する機会はなく、愛のエネルギーを結集できず、今のよう慈善の足跡が百三十六の国と地域に到達することはなかったでしょう。

人口は増え続けていますが、地球は一つしかないため、どうすれば大地を破壊せず、どうすれば気候変動の影響を避けられるでしょうか。仏陀は、衆生に真理を理解させるために、人間（じんかん）にやって来たのです。仏法のたとえに、「衆生の心が浄化されなければ、人間（じんかん）はまるで『火宅』のようだ」とあります。長者が炎に包まれた屋敷にいる子供たちに、早く逃げるよう呼

び掛けても、子供たちは依然として欲望を追求し、それに夢中になっているのです。火宅から救い出すにはどうすればいいのでしょうか。それには、彼らの心を救わなければなりません。

「心、仏、衆生の三者に違いはありません」。誰もが仏性を持っていますが、長い間無明の煩惱に惑わされて来たため、目覚めることができないのです。ですから学ばなければならず、菩薩道を歩んで「覚り」という目標に向かって進むのです。もし菩薩道を歩まなければ、あなたは迷える無知な子供と同じであり、思いはあっても実践しなければ

ば、いつまでも同じ場所に留まったまま、決して到達することはできません。この菩薩道がこの世にあるのですから、自分の目で見学ぶのです。人生の苦しみを知らなくては幸福を作ることはできません。幸福を浪費するだけで楽しみに浸っていたら、絶えず心が動いて、貪、瞋、癡という無明に執われ、地獄にいるように苦しみから逃れられないでしょう。

「人心の浄化と平和な社会」は、私がこの生涯で最もやり遂げたいことです。ですから、毎日の言葉にもこの願いを込めているのです。自分を過小評価し

ないで、自分に備わっている良知の本性を引き出してください。心の泉を結集すれば、大地を潤すことができ、心の泉が純粹であれば、悟りを開くことができ、人を悟りに導くこともできるのです。

私の師匠は「仏法の為、衆生の為」という言葉をくれ、私は全力を尽くしてきました。慈濟人は必ずしも仏教徒ではありませんが、誰もが仏心を持っています。宗教によって名称は仁愛、博愛、大愛と違って、共に善を行えば、その力は非常に大きなものになります。八月上旬、慈濟人は再度ブラジル南

部のリオグランデ・ド・スル州を訪れて災害調査をしました。洪水から数カ月が経過していましたが、撮影された写真から災害の爪痕が依然として残っていることが見て取れ、人を派遣して調査と配付をする必要があることが分かったのです。地元の神父は教会の仲間と呼びかけ、慈濟人と協力して被害を受けた住民を支援しました。私は、宗教を超越した神父の精神に敬服し、感謝しています。お互いの宗教を尊重し、励まし合って善行することは、即ち善の原点に回帰することに他なりません。

善行を成就して誰かを救うのは、心の一念によります。しかし、因縁が有っても行動に移さず、目も耳も閉じていては、助けを求める人の声も聞こえず、姿も目に入らず、人助けの機会は通り過ぎて、せつかくの思いも無になってしまいます。

「菩薩」とはサンスクリット語で、悟りを開いた情のある人を意味します。菩薩になるにはどのように学べばよいのでしょうか？それは非常に簡単です。耳で聞き、目で見れば、助けることができるので、もっと聞いて、見て、一歩ずつ奉仕すれば良いのです。千里の

道も第一歩から始まります。菩薩とは単なる固有名詞ではなく、この世に現実に存在するのです。その発心は目に見えず、触ることができなくても、皆さんの努力を結集することで、計り知れない大きな功德になります。

菩薩の精神は清浄で無私の愛であり、広い心を持ち、清浄な意識で以って接するため、生きとし生けるものを愛することができなのです。この世の苦しみに心を寄せ、心も行動も菩薩道から離れず、一途に歩んでください。皆さんが心して精進することを願っています。  
(慈濟月刊六九四期より)



# 菜園から食卓まで 新鮮で清らか そして健康な食事



文・寧明静（慈濟ボランティア） 撮影・蕭耀華 訳・施燕芬

## 数

日前、寒波が襲来した。雨が降りだす前にと、朝早く徳棘（ドールイ）師父と数人のボランティアの後ろについて、畑の草取りに行った。広大な敷地の中、静思精舎の協力工場の隣にある大きな畑は正方形で、一つ一つの畝の

土がまっすぐ美しく盛られていたが、その全ては師父がボランティアを率いて耕したものである。

区画ごとに異なった野菜を栽培しており、冬にはレタス、サヤエンドウ、キャベツ、ほうれん草、春菊、油麦菜（ゆば



くさい)、大根、芥藍(カイラン)などが栽培され、夏にはサツマイモの葉やナタマメが成長する。また、料理の味をグレードアップする台湾バジルとパクチーの存在も事欠かない。

青々とした畑の中に、一カ所だけ違っているが、それはパッションフルーツである。緑色の果実が棚の下に垂れ下がっていたが、幾つかはもう赤くなっていた。

「二、三日したら収穫できます。天然のさっぱりした甘さで、新鮮でとても美味しいのですよ」。ボランティアーリーダーの指さす方角を見ると、そこに赤くなりつつ

ある実があった。収穫が楽しみである。

「私たちは農薬や化学肥料を使わないので、健康を害さなく、安心して食べられます。健康だから、もちろん上人の食事にも出しています」。「清らかな源」という理念に基づいて、自信を持って自然栽培法をしている師父が、傍らで説明を補った。

この上ない感謝の気持ちで  
食べ物に接する

四季の移り変わりによって、畑の野菜

や果物は次々と入れ替わる。精舎の師父

たちは、「一日働かなければ一日食せず」という静思家風を日々遵守し、自力更生の生活を続けると共に、世界各地から戻ってきた慈済人や来訪した善意の人たちを精一杯もてなしている。

草むしりに没頭している師父の携帯電話が突然鳴り出したので、近くで餌を探していた鳥たちがびっくりして飛び立った。

「こんにちは、畑にパクチーはありませんか」。精舎で食事担当の師父からの電話だった。

「ありますよ」。

「今日のお昼におでんを作るので、彩りのためにパクチーが必要なのです。採って持ってきて来てくれないでしょうか」。

「はい、分かりました」。

寒くなってきたので、師父たちはみんなのことを思い遣って、温かいスープを作ることにした。

普段のメニューは「一汁四菜」だが、塩味と薄味の料理が程よく配合されていて、見た目が良くて美味しい。一つ目は青野菜で、そのほとんどが精舎の菜園で採れた新鮮な野菜を使っている。二つ目



は蛋白質の源である豆腐、湯葉など豆類のメニューである。三つ目は味の濃い料理で、煮込み冬瓜やサイシン、ゴウヤ、昆布煮などである。四つ目は彩りよい料理で、セロリとにんじん、銀杏など、五色の食材による様々な栄養が網羅されている。

午前十一時を過ぎる頃、厨房で調理されていた料理ができると、鍋から取り出し、素早く盛り付ける。師父たちはボランティアと協力して、秩序正しく料理を食卓に並べる。食堂には丸テーブルが五、六十卓あり、各テーブルには取り箸とスプーン、ステンレス製の鍋に盛られ

たご飯、光沢のある小さいお湯の入った急須が用意される。

自分が食べられる分だけを取り、食べ終わると小さい急須からお湯を茶碗に注ぎ、回して残ったものを飲みほしたら、食事終了である。食べ物、ここ精舎ではこの上ない感謝の気持ちで大切にされている。

世界中で長期的に飢えている人は八億人を超え、おおよそ世界総人口の割を占める。環境保護署の統計によれば、台湾では毎年約百三十五万トンの食べ物が無駄されているそうだ。もし国民一人当たりの食糧を年間五百四十七キロと計算

すると、二百四十万人余りがお腹を満たすことができる量だという。「金持ちの一食は、貧乏人の半年分」と言う言葉思い出した。

## 世界を変えた食事

人間と自然のリズムが調和している状態が理想であり、目標でもある。食事はもはやお腹を満たすだけの行為ではなく、人類の肉食が生態へ及ぼす影響は、地球にとって深刻な脅威となっている。二〇二三年十一月十七日、地球の平均気温が初めて摂氏二度以上上昇した。最新

の国連の報告によると、もっと積極的に有効な行動を取らなければ、平均気温が摂氏三度上昇してしまい、地球に壊滅的かつ取り返しのつかない影響を与える恐れがあるとのことだ。

「全粒穀物は健康を維持でき、最高の食べ物です」。

「地球を守るためには、誰もが菜食をしなければなりません」と證嚴法師は切実な願いを語っている。

二〇〇七年、台湾に招待された国際自然保護活動家であるジェーン・グドール氏は、「あなたが食べる全ての食事は、世界

を証と言え。

地元の旬のものを食べることは、食べ物の輸送距離を減らし、包装資材の製造による二酸化炭素と汚染を減らすことができ、家畜を飼育するための大量の水の消費と森林伐採も避けられるのである。世界で飢餓に苦しむ人々と日に日に悪化する環境に関心を寄せる、というこの基本的な人道精神は、日々の簡素な食事、つまり菜食への感謝から始まるのである。

(慈濟月刊六八七期より)



を変えることができるのです」と訴え、食生活を変えることで地球を守ろうとしている。

食事の源である農地に対し、法師は自然に回帰しよう、と繰り返し訴えている。四季の節氣に従って、その土地で耕し、その農作物を適時に収穫し、鳥が飛び交い、虫が走り回っていれば、古くから伝えられた農耕法の知恵が今も息づいてい

## 基隆刑務所での歳末祝福会

# 感動を遮るものはない

警備体制下で開かれた歳末祝福会では、十九名の基隆刑務所慈済読書会メンバーが、一年間の読書の心得を慈済手語劇で表現した。彼らの歌声と心の声の間には隔たりがなく、ただ「胸一杯の感動」があるだけだった。



●歳末祝福会の慈済手語劇の様子。最後列で大きな字のカンペを掲げて、舞台上の読書会メンバーを助けた。

# 会

場となった基隆刑務所の活動センターには、元来卓球台が置かれてあったが、二〇二三年十二月十五日、刑務所職員同行の上で、慈濟ボランティアが巧みに配置を施した。画面が投影される壁の前には、青いベルベットの布で覆われたテーブルの上に瑠璃の三尊仏が置かれ、ピンク色の蓮の花と緑の植物が彩りを添え、澄みきった水の中に咲く清らかな蓮の花を思わせた。

百名近い「同級生」が整然と隊列をなして活動センターに入り、矯正科主任が臨席し、警備員も立ち会って、古箏（こそう）の演奏が優雅に流れる中、歳末祝

福会の幕が開けた。

「慈濟ボランティアは何年も基隆刑務所と交流しています。ここで歳末祝福会を開催するのは今回が初めてです。私たちは皆さんに幸福と慧命（えみょう）を贈り、證嚴法師からの祝福を届けたのです」。慈濟ボランティアの洪金玉（ホン・ジンユウ）さんは「福慧お年玉」を開けて、そこに貼られた稲穂を指差しながら、多くの実を結ぶので幸福の種と呼ばれることを紹介し、出所後の未来が恩人に出会う機会のある明るいものになるようにと祝福した。

古箏の演奏がゆるやかに終わると、場

内は静まり返った。そして《開經偈》の音楽と共に靈山法会が始まった。壁に

二〇二三年「慈濟大藏經」が投影され、世界中の慈濟メンバーが行ってきたことを皆と分かち合った。トルコ・シリア地

震で災害支援に投入するシリア難民ボランティア、ハワイの大火災で負傷者を慰めるボランティアなど、入所者たちは皆、姿勢を正し、顔を上げて見入った。

ビデオ放映が終わると、司会の詹玫倩（ツァン・ウエンチェン）さんは、こう述べた。「慈濟ボランティアは、小さなホタルのように精一杯光を放ち、その小さな光を結集させることで、人々を助け

ているのです。皆さんは自分の力で人々を助けたいと思いませんか？」

「したいです！」というはつきりした返事が会場の一人ひとりを震撼させた。

## 矯正施設では八番目の閲覧室

基隆刑務所の廊下の壁には『静思語』が貼られている。長期的に寄り添ってきた慈濟ボランティアチームが、二〇二二年末に『静思語』を張替えに来た時、刑務所側に読書会を開く構想を提案すると、肯定的な反応が返ってきた。二〇二三年二月七日から毎週金曜日の午



後に九十分間行っている読書会は、今でも続いている。ボランティアの陳淑華（チェン・スウフワ）さんが皆に読み聞かせ、陳麗貞（チェン・リージン）さんが慈濟手語を教えた。

基隆刑務所の受刑者の刑期は、大方三年以下ということから、人の異動が頻繁にあるので、読書会の教材を選ぶ時は分かり易いことが原則だった。静思語の良い言葉や證嚴法師の語る仏教の物語、そして慈濟の歌、慈濟手語劇及び月刊誌『慈濟』などを選んで紹介した。また、二〇二三年十一月に、台湾の矯正施設としては第八番目の静思閲覧室を同刑

務所内に設置し、五百冊の良い本を揃えた。読書会の参加者は、初めは六、七人だったが、その年が終わる頃には十九人になった。

参加者の年齢は二十代から七十代まで幅広いが、皆真面目に学んでいる。慈濟手語に触れたことがなかった彼らは、最初はお互いの動作を見ながら何とか手を動かしていたが、やがて歌詞の意味を手で機敏に表現できるようになった。一句一句の意味を理解できた時は目を赤くした人や、題材の感想を述べたことによつて、寛容と放下を学んだ人も出てきた。

證嚴法師が出家した時のストーリーを

聞き終わった参加者Aは、家を離れて出家した自分の姉を許せる気持ちになった。参加者Bは、ガールフレンドの死をなかなか忘れられなかったが、因縁果報の道理を理解して放下したことで、顔つきが明るくなった。他の参加者も、人と争いになって、拳を振り上げようとした時、静思語やボランティアの励ましを思い出し、争いを止めることができた、と皆で分かち合った。

●ボランティアは一人ひとり受刑者に「福慧お年玉」を手渡した。皆、その小さな赤い封筒に入っている、「一から無量が生れる」ことを象徴した善の種子を見つめた。

受刑者たちの「出所したら慈済でボランティアをします」という言葉を聞いて、ケアチームは喜んだ。今回の歳末祝福会では、読書会参加者を慈済手語劇の舞台へ導き、一年間学んできた成果を披露してもらった。

## 新年からの読書会 参加を歓迎します

歳末祝福会で人々が最も期待するのは、福慧お年玉を頂くことなので、皆それを開けてじっくり見つめた。続いて読

書会のメンバーが二列に並び、経蔵劇を始める準備をした。参加者たちが緊張してセリフを忘れてしまうことがないようにと、ボランティアたちは大きな字でカンペを書き、客席の最後列で椅子の上立って高く掲げた。指導した陳さんは木の板の上に立ち、メロディーに合わせて舞台上のメンバーにヒントを与えた。

「輪廻の道を歩く時、道中で足るところを知るべき……」という《自如》のメロディーに合わせて、同級生たちは両手を挙げたり合掌したりしていた。経蔵劇『徳行品』の偈頌を演じた時、彼らの動

作が一糸乱れず整然としていたので、座席にいた同級生たちも感化され、一緒に手を動かし始めた。最後列にいた同級生は、ボランティアがカンペを持っているのを見て、自主的に手伝いを申し出て両手で掲げた。時には少し低くして、舞台の演技を見逃さないようにした。

舞台にいた七十歳近い同級生が、慈済に読書会を開催してくれて有難うと感謝の気持ち述べ、会場に出席していた同級生たちにも参加するよう呼びかけた。すると、会場から賛同の声と拍手が起きた。矯正科主任も慈済ボランティアチー

ムに感謝した。

「所長と秘書の許可を得てから各部門も協力してくれたので、初めて所内で歳末祝福会を行うことができました。同級生たちの良い行いを目にすることができてとてもうれしく思います」。

同級生たちは、合掌して「この世に災害が無くなるように」と祈り、来たる年に願いをこめた。

やがて新しい年を迎えるが、ここにある良い言葉と良い本が、ここで心を落ち着かせる力となって欲しいものだ。

(慈済月刊六八七期より)



# 三十年を振り返る 愛で以て傷を癒す

華人を標的にしたジャカルタ暴動、ジャカルタの大洪水、スマトラ島沖地震（インド洋大津波）、新型コロナウイルス……この三十年間、激甚災害の支援の度に、慈済インドネシア支部は歴史を書き換え、愛で以て垣根を取り払うことに取り組み、傷を癒して来た。



● 2023年9月、慈済インドネシア支部は30周年を迎え、郭再源師兄（グォ・ザイユェン、中央左）、黄榮年師兄（ホワン・ロンニェン、中央右）及び台湾から出席した慈済基金会の顔博文（イェン・ポーウェン）執行長（中央）が喜びを分かち合った。

なかったことである。

## 第一回大規模医療ケア活動

一九九三年、劉素美（リュウ・スウメイ）師姐が数人の台湾実業家夫人と共に慈済の志業を始め、慈済をインドネシアに根付かせた。もし、素美師姐が勇猛果敢に担っていなければ、今日の慈済インドネシア支部はなかっただろう。私たちは彼女にとっても感謝している。最初の慈善ケースとして、貧しい家庭の子供への学費支援、第一回災害支援として、ムラピ山の噴火後に行った被災者支援が

一〇二三年、慈済インドネシア支部は三十周年を迎えた。私は一九九五年に慈済に参加し、既に二十八年が経過したが、自分はとても幸福であり、インドネシアも幸福に満ちている場所だと思っている。それは、こんなに多くの師兄や師姐と共に慈済の志業を行っているからである。

現在、慈済インドネシア支部には一万五千人余りのボランティアがいて、十八の連絡拠点がある。ジャカルタに荘厳な静思堂を建立し、慈済小学校、慈済病院及び大愛テレビ局もできた。それらは、私が慈済に参加した頃には考えられ



ある。集まった募金をジョグジャカルタ省の社会福祉局に渡し、十二戸の「大愛の家」を建てた。

一九九五年から、慈済はジャカルタ近隣のタンゲラン県衛生局と共同で、肺結核撲滅プロジェクトを進め、定期的に薬を配付するようになった。私はその時初めて、インドネシアの肺結核症例が当時の世界で第二位だったことと、六カ月から九カ月間継続して薬を服用し、食生活

●インドネシア慈済人は一九九五年、ジャカルタに隣接するタンゲラン県政府と共に「肺結核撲滅プロジェクト」を推進し、賈文玉師姐（中央）が村人に説明した。

と生活習慣に気をつければ、必ず治ることを知った。

慈済がミルク、緑豆、米等の物資を提供し、ボランティアが二週間に一回体重計を持参して患者の体重を測定した。体重の増加は、栄養が付き、病状が改善されたことを意味するからだ。しかし一部の患者には、ミネラルウォーターを服の中に入れて、体重が増えたように見せかける人もいた。というのも、彼らのライフスタイルでは十分な休息を取る余裕がなかったり、栄養のある食べ物を全て子供に残したりしていたからだ。私たちは絶えず彼らに、病をしっかりと治す

み、人苦しめば我悲しむ」という言葉の意味を、つくづく実感した。

私はシナルルマスグループ創設者黄奕聡（フワン・イーツオン）さんの秘書をしていたが、一九九八年五月九日、黄おじさんが夫人と息子の栄年（ロンニエン）師兄を連れて台湾を訪れ、法師に拝謁した。それは知らず知らずのうちに運命で定められていたのだと感じた。その証拠に、五月十三日、ジャカルタで「暗黒の五月暴動（ジャカルタ暴動）」が起きた。その頃がインドネシア史上、最も暗黒な時期であり、華人排斥暴動に対して、法師は私たちに「愛で以て憎しみを解消す

ようにと説得した。一九九九年までに、千百八十三人の患者をケアした。

当時、私たちは肺結核のことをよく理解しておらず、至近距離で接する時はマスクと手袋を着用する必要があることを知らなかった。シンガポールの慈済人医会の医師が、私たちが患者の手を引いている写真を見て、他人をケアする前に、まず自分を守るようにと教えてくれた。その時初めて、ウイルスの危険性を知った。それは、慈済がインドネシアで最初に行った大規模医療活動だった。当時は誰もがとても感動し、実践している中で、證嚴法師がおっしゃる「人傷つけば我痛

るのです」と諭された。

私たちは、安全を守ってくれる軍と警察及びジャカルタ周辺の民衆に米を配付した。栄年師兄とシナルルマスグループの支援、そして軍と警察の協力があったからこそ、あのような緊迫して混乱した時に、大規模な配付活動を展開し、千百トンの米を配付することができたのである。

しかし、あの時の状況は依然として厳しく、空港を往復するシナルルマスグループ職員が栄年師兄に、誰々もシンガポールに行ってしまったと話しているのを聞いて、私もとても怖くなり、本当に国外に



逃れたいと思ったものだった。だから余計に、黄おじさんと栄年師兄、シナールマスグループの師兄や師姐たちが国を離れなかったことに感謝した。

### ジャカルタ大洪水が縁を成就させた

二〇〇二年一月、ジャカルタで大洪水が発生した。最も甚大な被災区域はアンケ川下流で、沿岸には貧民がいっぱい住んでいて、河はゴミに被われていた。ボランティアは浸水区域に入り、炊き出しと施療を行った。ある日、黄おじさんは私に、「文玉（ウエンユエ）、慈済の師

兄や師姐、そして医療チームを招いて会食をしたい」と言った。黄おじさんは、慈済が休まず被災世帯をケアしていることを知っており、加えて旧正月を迎える頃だったからである。

私はあの日のことを永遠に忘れることはない。二〇〇二年二月二十三日の土曜日だった。会食の場所は郭再源（グオ・ザイユエン）師兄のボロブドゥールホテルだった。思賢（スーシエン）師兄はわざわざ台湾からジャカルタに来て、阿源（アーユエン）師兄と麗萍（リーピン）師姐も初めて慈済の活動に招かれた。会食の席で、黄おじさんは「慈済に被災住

民にもっと多く支援をしてもらえないでしょうか？」と言った。大洪水が過ぎて二カ月近く経っても、依然として多くの人が道端に住み、ちゃんとしたシェルターもないことをテレビで見て知っていたからだ。思賢師兄は、支援プロジェクトがとても大きいので、法師に指示を仰ぐ必要があると言った。

黄おじさんは見るに忍びなく、三月六日栄年師兄や素美師姐ら、そして私を伴って、花蓮に向かった。黄おじさんを

●1998年5月初め、シナールマスグループ創設者の黄奕聡氏夫妻が花蓮を訪れ、上人に拝謁した。

見て、法師は「私は黄居士のお力を借りて、企業家たちと一緒に被災地の清掃をしてくれたりと思っっています」と言った。

ジャカルタに戻ってから、黄おじさんは早速慈済ボランティア全員を集め、どのように被災地を清掃するかを話し合った。翌日、黄おじさんは阿源師兄をオフィスに招き、「上人は、私たちが一緒にジャカルタを清掃することを望んでいます。一緒にやってくれますか？」と聞くと、阿源師兄は直ちに頷いた。

オランダがインドネシアを統治していた時期、数多くの華人を虐殺したことで河が赤色に染まり、それが元でアンケ川

と呼ばれるようになった。私たちは華人として、この川が抜本的に浄化され、大愛村が建てられ、更にこのような愛と温もりの物語に満ちた場所になるとは、思ってもいなかった。

### 省長が大愛村の二十年をこの目で見てきた

当初、多くのアンケ川沿いの住民は引越に消極的だったが、師兄、師姐たちは、これは防災のためだけではなく、大愛村には学校や病院、良好な環境もあり、子供たちが大愛村で暮らせば希望が

出てくる、と説明して聞かせた。

今でも覚えているが、大愛村建設の時、慈済は一世帯につき五十万ルピア（約四千元）の補助金を出して、仮住まいをしてもらった。その頃、陳豊靈（チェン・フォンリン）師兄と彼のチームがジャカルタ政府と交渉したが、容易ではなかった。一方、私たちは募金活動をした。一軒あたりのコストは五千万ルピア（約四十万円）と見積もり、大愛村には千三百軒を建てるので、「寄付して大愛の家を建てることは祝福であり、自分を祝福し、子供や孫も円満な家庭を持つことができるよう祝福しましょう」と呼び

かけた。

当時、阿源師兄は慈済に参加して間もなく、もし集めたお金が足りない時は、不足部分を自分と榮年師兄が折半して負担しようと提案したところ、榮年師兄はためらうことなく同意した。後で知ったことだが、実はその時期がシナールマグループにとって最も困難な時期だったのだ。

この川を整治していた間、思賢師兄がジャカルタを八回も訪れたことに、私たちはとても感謝している。ある夜、私が空港に出迎えに行くと、彼がこの川を見たいと言ったので、「こんな遅い時間



に見ても仕方ないのに」と思ったものだ。丁度数トンのゴミを清掃したばかりだったので、車を降りると、私はその臭気にすぐ鼻を覆ってしまった。思賢師兄は逆に満足そうに、「どうです、この景色はベニスに似ていると思いませんか？ 岸辺で誰かがギターでも弾けば、もっとロマンチックでしょうね」と私に言った。その言葉を聞いて、私は手を下ろし、二度と鼻を覆うことができなかった。思賢

●アンケ川は整治される前は、現地の人から「ジャカルタの黒い心臓」と呼ばれた。住民は川縁に違法建築を建て、生活用水は河から汲み取り、汚水もゴミも河に流していた。

師兄は、私たちがこのアンケ川の整治という大規模な慈善プロジェクトを進めていたことを目にして、とても感動していたことを私は知っている。

二〇二三年五月、豊霊師兄は私のオフィスに来て、昨日ジャカルタ知事代行のヘルさんと会食した時、私が彼に「大愛村は八月で設立二十年になります」と言うと、彼は感動しながら「早いものですね」と答えた。

その時豊霊師兄が突然言葉を切ったので、私が「泣いているのですか？」と聞くと、彼は頷きながら「そうです！」と言った。二十年前この川の整治をしてい

た当時、ヘルさんは北ジャカルタ市の職員だったが、彼は全力で取り組み、豊霊師兄も全身全霊で打ち込んでいたのは、全てジャカルタのためだった。あれから、二十年が経ち、今思い返すと、感動せずにはいられないのだ。

二〇二三年八月二十六日、大愛村は二十周年を祝った。村民たちは台上に上がって、移住後の変化と子供たちがとても優秀になったことを分ち合った。このことから私は、慈済で何を奉仕しても、必ず善い縁になると感じた。なぜなら、私たちの行動は自分のためではなく、社会に福をもたらすためだからだ。



●大愛村で成長したダグナスさん（上の写真、左）は現在警察官になり、母親のトゥティンさん（右）は移住したことで生活が改善されたと感謝した。

●チェンカレン大愛村は2023年8月に20周年を祝った。ジャカルタ知事代行のハルさん（右の写真、中央）は当時、ジャカルタ市の職員で、村の建設に尽力した。

## 五万トンの米は慈済の種

二〇〇三年から二〇〇七年まで、インドネシア慈済は五万トンの米を配付したことで、インドネシア各地に「慈済の種」をもたらした。

この件は、阿源師兄が数人の企業家を伴って花蓮を訪れていた時期に、台湾農業委員会が、十万トンの人道支援米を慈済の貧困救済に割り当てると聞いたこと



が始まりだった。法師がインドネシアは何トン必要ですかと聞いたところ、阿源師兄は正直に、「五万トンです」と答えた。ジャカルタにいた私たちは、五万トンの米を全部配付すると聞いて、やる前から疲れてしまった！

一世帯に二十キロ配付するとして、五万トンということは、二百五十万世帯に配付するのである。当時、ボランティアの人数はとも限られていたが、阿源師兄は、暴動以降、インドネシアの経済は回復しておらず、人民の生活は依然として困難だったことを考えていた。

その大量の米は、台湾の高雄からジャ

入れることができ、多くの大企業家が従業員を派遣して協力してくれた。

米の配付は難しいことではないが、困難だったのは物資の引換券である。打ち合わせの時は、四人一組で引換券を配付する予定だったが、現地に着いてみると、配付範囲がとても広がったため、一人一組に変わった！スラム街に入って引換券を配付するのは、やはり怖く感じ、終わってからも万一、他の師兄、師姐と合流できなかったらどうすればいいのか？ またもし、全部配付してしまっても、まだ多くの世帯に行き届いていなかったら、新たに引換券を持って来てもらうま

カルタの埠頭まで輸送するだけでも百万ドルかかったが、十人の実業家が費用を分担してくれたのだ。とても感謝している。ジャカルタからインドネシア各地への輸送費用は、各地域の実業家に負担してもらった。

当時参加してくれた師兄や師姐たちにも、とても感謝している。なぜなら、全ての国がインドネシアのように幸福ではないからだ。一部の国ではボランティアが米を配付したいと考えても、輸送費を支払う余裕がない場合もある。インドネシアでは、その時の米の配付活動のおかげで、多くの新しいボランティアを迎え

でそこで待つのもとても怖いのだ。またもし、引換券が余ったら、バイクタクシーに乗って隣村まで行き、配付を続けなければならなかった。

あの時、私は生まれて初めてバイクタクシーに乗り、一方の手で引換券と慈済のバッグを持ち、もう一方の手でバイクの後ろにあるタンデムバーを掴みながら隣の村に行き、午後まで配付を続けた。

## インド洋大津波で、仏法を体得

二〇〇四年、インド洋大津波により、インドネシア・アチュ州等で二十万人





●台湾の農業委員会（現：農業部）は2003年、米の対外援助を行なった。その内の5万トンがインドネシアの慈濟人が食糧不足の民衆に配付した。

以上が犠牲になった。あの年の十二月二十六日、阿源師兄と家族は上海にいたが、ニュースを見て直ちにジャカルタへ戻った。二十八日、直ちに数人のボランティアと共に、専用機に救援物資を積んで被災地に向かった。災害はあまりにも大きく、空港では人々は裸足のまま我先

にと飛行機で離れようとしていた。阿源師兄は、「人は何も持って行けないが、業だけがついて回る」の意味をつくづく実感した。

最初、アチエへ災害支援に向かった時、恐怖を克服するのが大変だった。なぜなら、テレビであれだけたくさんの方が亡



●2004年12月のインド洋大津波により、甚大被災地域のインドネシア・アチエ州では約20万人が命を落とし、インフラもひどく破損した。(写真上)アチエ州の大愛一村(1期目)は2005年から入居が始まり、ユドヨノ大統領(写真下・中央右)が訪れた。(写真下、撮影・顔森沼)



くなったり、家族を失ったりした映像を見ていたからだ。被災地に着くと、重々

しい空気を感じたが、師兄や師姐たちの勇敢な奉仕を目の当たりにした。秋蘭

(チュウラン) 師姐は現地で三カ月間調理ボランティアをし、何人かの師兄は災害支援と同時に遺体の搬送を手伝い、所

謂「大悲心」(だいひしん)を真に実践していた。

今回の災害はその時代の悲劇であるが、慈済はそれが縁となり、アチエ州に二千七百戸の大愛の家を建てた。阿源師兄が現地政府と交渉してくれたことと、栄年師兄が何千トンもの支援物資の貯蔵

と輸送に協力してくれたことに感謝している。そして法師、街頭募金をしてくれた世界中の慈済人と共に成就できたことに感謝している！

## 互いに信頼し愛することで 無事に過ぎたコロナ禍

二〇二〇年から、新型コロナウイルスによる世紀のパンデミックで、人々は自由に行動することができずにいたが、慈済インドネシアは逆に、その三年間に多くの良縁を結んだ。真っ先に全国の医療機関に大量の防護服、簡易検査キット、

薬等を寄付し、インドネシアの最も遠い離島ニアスにも慈済の支援が届いた。それはインドネシアの慈済人が互いに協力し合ったからこそできたことであり、それ以上に素美師姐が責任をもって自分のポジションを守り、ジャカルタに留まっ  
て、私たちのために指揮してくれたことに感謝している。

二〇二三年六月十四日、ジョコ大統領がインドネシア慈済病院の開業式に訪れ、私たちはとても嬉しく、光栄に思った。インドネシアでは、慈済病院にだけ患者とその家族をケアするボランティアがいるが、病院で生、老、病、死を感じ

取ることができると、より多くの人が共に医療ボランティアとして参加してくれることを期待している。

慈済インドネシアはこの三十年間、非常に多くのことを経験し、私たちにブツダが説いている「苦」という言葉を深く実感させてくれた。奉仕することと他人

を思いやることを学び、その過程で自分も成長し、より価値のある人生になったと思うし、もちろん慧命も延びたと思う。今生に慈済という道場で修行ができたことに感謝し、生生世世菩提（悟り）の道を歩むことを発願する！

（慈済月刊六八七期より）



### 賈文玉（ジャ・ウェンユ）のミニプロフィール

- ・ 1957年生まれ、1995年にインドネシア初の認証を授かった慈済委員になる。
- ・ 1992年シマルナスグループに就職。慈済をグループの創設者黄奕聡さんに紹介し、実業家を迎え入れて、共に慈済志業を続けてきた。

## モザンビークに希望が見えた

◎文・釋徳侃／訳・済蓮



心して伝法し、当地に智慧を伝え、  
助けを求める声を聞けば

駆けつける菩薩の精神と愛のエネルギーを大衆に伝え、  
人と人が愛で接し、

見返りを求めず奉仕することを願っています。

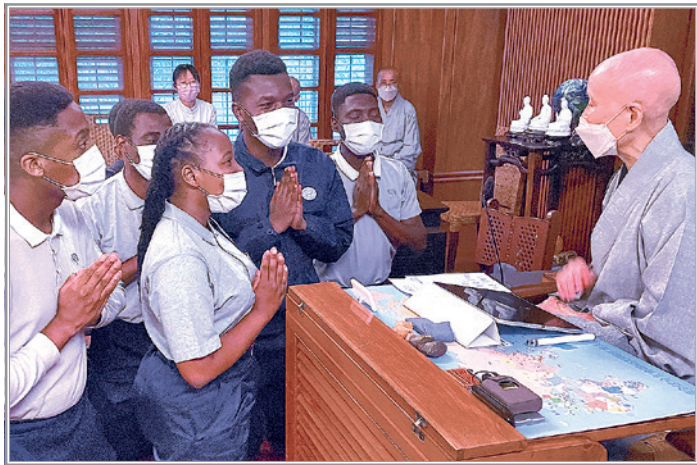
六月十日、モザンビークの蔡岱霖（ツァイ・ダイリン）師姐たちは、  
当国中部で建設している大愛村と希望工程に関する事務担当の本部  
職員、台湾の慈済学校で勉強しているアフリカの学生十数人、そし  
てオンラインで報告したモザンビークの慈済ボランティアたちを伴  
い、オンラインで上人と端午の節句を祝いました。

岱霖師姐は、メトウシラ大愛村の由来から報告しました。メトウ

シラ町は川沿いにあり、住民の多くは農耕で生計を立てています。  
サイクロン・イダイで被害を受けてから、一部の住民は地理的に高い、  
今大愛村を建設している場所に移住せざるを得ませんでした。慈済  
ボランティアが緊急支援で住民に物資を配付する以外に、マップか  
らも現地ボランティアが来て、長期的に地域ボランティアの先頭に  
立つて大愛農場を運営しています。村人が慈済の配付した種を使っ  
て栽培した結果、実り多い豊作となり、経済状況が改善しました。  
メトウシラ町には今、二千七百人余りのボランティアがいます。

高敬堯（ガオ・ジンヤオ）師兄が「大愛村が出現した」状況を簡  
潔に報告しました。二〇一九年にイダイ支援建設プロジェクトが始  
まりましたが、紆余曲折の後、二〇二二年四月にやっと本格的な工  
事が始まり、二〇二四年四月に大愛村の四百十戸全てが完成しまし  
た。村人は、慈済は唯一サイクロン被害から今日まで途切れること  
なく寄り添ってくれた団体です、と感謝の意を表しました。

モバンビス中学校では、被災した直後、使える教室は僅か三つで、



五千人の教師と生徒に対して二つの野外トイレしかありませんでした。支援建設プロジェクトは二〇二二年六月に始まり、二〇二四年一月に完成し、当国の大統領自らが出席して起用式典を主催しました。その後、慈済ボランティアは引き続き学校に関心を寄せ、静思語教育を推し進め、衛生概念などを教えています。岱霖師姐によると、慈済の愛は学校からコミュニティに広まりました。モバンビス中学校はソフアラ州ドンド郡にあり、郡長は、慈済人が長期駐在できるようにと、学校に隣接する宿舍

上人は、中国語と仏法精神の習得に努めるよう、台湾で勉強するモザンビークの学生たちを励ました。

(6月10日)

を無償で提供してくれました。慈済は今年二月からコミュニティで愛を広める活動を行っており、多くの住民は静思語に出会ったことで、家族関係が改善されたり、以前は思いつめていた人が静思語に心を打たれ、生きていく原動力を見つけたりしたことで、今は地域ボランティアとして精進しているそうです。

当国では、大学に進むチャンスがある人は僅か八パーセントしかいません。そこで、青年養成プロジェクトによって、二〇一九年から今まで十三人の学生が台湾に来て勉強しており、そのうちの五人は既に学業を終えて帰国し、慈済の連絡所で奉仕しています。慈済は現地の中学校や職業学校と協力を続けていますが、今年は学校側から、百七十人余りの優秀な卒業生の推薦がありました。学生は筆記試験と面接、チームによる査定、総合評価を経て、台湾に来て勉強できる資格を得ます。

上人は、台湾に来て勉強する若者たちに、引き続き勉学に励み、進歩し続けるようお願いかせました。中国語を習得するだけでなく、

発音も正しくなければならぬこと、そして、慈済精神を学んで心に刻み、学業を終えて帰国したら、困難な生活をしているお国の人々を助けて欲しいと言葉をかけたのです。

「岱霖にはとても感謝しています。モザンビークで慈済との因縁を築いたことで、この国の若い人たちは台湾で中国語とその他の知識や技術を学ぶことができたのです。彼らはとても頑張っており、モザンビークの未来には大いに希望がある、と感じました」。

支援を受けている住民も現地ボランティアも、多くがキリスト教徒です。

「信仰を心の拠り所とする以外に、自分でも努力しなければいけません。慈済人は仏教精神を学ぶ対象であり、仏陀は悟りを開いて、遍く衆生を愛しました。慈済人は、モザンビークで大衆の先頭に立ってボランティアをする時、心して仏法と智慧を現地に伝えなければいけません。助けを求める声を聞けば駆けつける菩薩の精神と愛のエネルギーを大衆に伝えることで、人々が互いに愛を啓発し合

い、見返りを求めない奉仕をするよう導くのです」。

上人は、慈済が当地で大愛村や学校を建てるのは、見返りを求めない清らかな大愛であり、人々に求めたいのは、精進して積極的な生活に立ち向かって欲しいということだけです、と言いました。

「報告の映像からモバンビス中学校が完成したことが分かりました。灯りがついたその瞬間、私は言葉で言い表せないほど嬉しく感じました。この先、子供たちは安心して勉強ができ、学校は現地で人材の育成をすることができます。社会に希望ができたのです。若い人が教育を受けられれば、国に希望が見えます。これこそが、私たちがモザンビークで奉仕している目的なのです」。

そして上人は、本部の数人の職員が、支援建設工事のために、使命感で以って現地に駐在し、我慢強く現地の気候に馴染み、真面目に心して投入してくれたことに感謝しました。

「将来、その大愛村は輝き、生氣溢れる人々が集まる場所となり、地域の発展をもたらしてくれるでしょう」。(慈済月刊六九三期より)

# 九月の出来事

訳・済運

|       |   |
|-------|---|
| 09・01 | <p>慈済チリ連絡所は僑聯総会友好会館で、アブラザルテ財団及びフェルナンド・アラゴン・スカウト連盟と共同で、冬季の配付活動を行い、マポチヨ川流域で貧困環境にある20世帯に、菜食のランチと生活物資を届けた。</p> <p><b>オランダ領セントマールティン</b>の慈済ボランティアである張傑榮さんと朱細芳さん一行5人は4日、セントヴィンセント及びグレナダイン諸島に到着し、翌日港で簡単な貨物受け取り式典を行った後、政府緊急行動センターと台湾駐オランダ代表、現地のボランティアと共に、船でユニオン島とカヌアン島、メイルー島に渡り、ハリケーン・ベリルで被災した500世帯を対象に生活物資を配付した。</p> |
| 09・04 |   |

|       |  |
|-------|--|
| 09・05 | <p>静思語出版35周年に当たり、慈済香港支部は、当地の学校向けに静思語読書を紹介する書籍贈呈プロジェクトを開始した。本日、慈済ボランティアは仏教孔仙洲記念中学校と宝覚中学校を訪れ、静思語系列の書籍を寄贈した。</p>  |
| 09・06 | <p><b>インド</b>慈済仏の国プロジェクトチームは本日、23箱合計900足の運動靴をムンバイのインド仏教ABM組織を通じて、2つの学校で貧困家庭の生徒に配付するなどの支援を行った。</p>  |
| 09・10 | <p>慈済基金会の顔博文執行長と執行長室付属グローバル協力及び青年発展室の陳祖淞副主任らが10日、東京に向かった。<b>日本</b>の衆議院議員の佐々木氏の紹介で、11日に内閣府の平沼正二郎復興大臣を訪ね、慈済の災害支援の原則と精神をシェアし、将来は協力し合う機会が得られればという期待を込めた。一行は13日に帰国した。</p> |

|       |       |   |
|-------|-------|---|
| 09・17 | 09・16 | <p>14日、<b>フィリピン</b>・マニラのトンド地区で火災が発生し、約2000世帯が住む所を失った。慈済ボランティアは本日視察に行き、被害状況の聞き取りと今後の支援を査定した。</p> <p>◎慈済インドネシア支部は中部ジャワ州マゲラン県ボロブドゥール町で、米5キロと砂糖1キロ、食用油1リットル、大愛麵10パックが入った生活物資5000箱を7つの地区の貧困環境にある人々に配付した。</p> |
|       |       | <p>を配付した。</p> <p>◎慈済基金会は0403花蓮地震後の「安心居住プロジェクト」における中継の家の新築起工祝福式典を催し、県政府職員と被災住民合わせて285人が出席した。この大愛の家は花蓮市主商段に位置し、集合住宅形式の140軒で、「Alfa Safe耐震シリーズ工法」を採用して、耐震強度を上げている。</p>                                      |

|  |   |  |
|--|---|--|
| 09・14  | 09・12   | 09・11  |
| <p>◎台風11号が<b>フィリピン</b>を襲い、水害と土砂災害をもたらした。慈済ボランティアは6日、被害状況の視察にリサール州アンティポロ市を訪れた。本日、3つの会場で被災した1119世帯に米と生活物資を配付すると同時に、家屋が全壊した住民に建材と交換できる引換券</p> | <p>台風11号が<b>タイ</b>北部に甚大な被害をもたらした。慈済基金会宗教処職員とチェンマイ慈済学校の教師たちは、チェンマイ県フアン郡とメーアーイ郡へ被害状況の視察に行き、被災した村民や学生の家庭を見舞うと共に、メーアーイ郡トレン村の泥流被害で亡くなった人の家族に慰問金を届けた。</p> | <p><b>パラグアイ</b>・アスンシオンの慈済ボランティアは、プレシデンテ・アイエス県ポソ・コロラド町のマクサウアヤという先住民コミュニティを訪れ、250の貧困世帯に38キロの食糧セットを届けた。</p> |



|   |   |
|---|---|
| 09・21   | 09・19   |
| <p>09・21<br/>           行った。</p> <p>23日まで、現地の恵まれない人々を対象に、歯科の施療活動を行った。6月15日と16日に視察した後、9月21日から</p> <p>活動を行った。6月15日と16日に視察した後、9月21日から</p> <p>23日まで、現地の恵まれない人々を対象に、歯科の施療活動を行った。</p> | <p>09・19</p> <p>◎慈済モザンビーク連絡所は、ソファアラ州ニヤマタンダ郡のラメゴ小学校で、1717人の生徒にキャンバスシューズと服及び静思語全集を配付した。</p> <p>◎アメリカ・南カリフォルニアで5日、ラインファイアとブリッジファイア及びエアポートファイアという名称の三つの大規模な山火事が発生し、1万世帯以上の人が避難した。慈済ボランテニアは、19日から24日までリバーサイド郡とロサンゼルス郡、サンバナデーノ郡のそれぞれの緊急救助センターに駐在し、被災者に現金カードと慈済エコ毛布の配付活動や情報提供を行った。</p> <p>慈済オーストラリア・パース連絡所は、初めてカルグーリーで施療活動を行った。6月15日と16日に視察した後、9月21日から</p> |

|   |   |
|---|---|
| 09・18   |   |
| <p>09・18</p> <p>飲料用水と食料、衛生用品など緊急援助物資を届けた。</p> | <p>◎モザンビーク・ソファアラ州ニヤマタンダ郡の慈済ボランテニアは、途切れることなくメトウシラ大愛農場を耕している。本日、収穫した野菜をメトウシラ大愛村の貧しい病人や孤児、お年寄りなど30の恵まれない世帯に届けた。</p> <p>◎暴風雨ボリスがポーランド南西部で洪水を引き起こし、多数の橋が流され、ダムが決壊した。慈済ボランテニア一行5人は本日、甚大被災地であるクウォツコとオウドジホヴィツェ・クウォツキエへ被害調査に行き、97世帯に慈済エコ毛布と緊急援助物資、買い物カードを届けた。</p> <p>マレーシア北部が暴風雨に見舞われ、ペナン州の多くの場所で倒木や水害が発生した。慈済ボランテニアは本日、バターワースとブキット・メルタジャムへ被害調査に向かい、避難所にいる住民を見舞い、飲料用水と食料、衛生用品など緊急援助物資を届けた。</p> |

# 各国の連絡所

## 本部

971 花蓮県新城郷康樂  
村精舎街 88 巷 1 号  
TEL: 886-3-8266779/886-3-8059966  
志業センター (静思堂)  
970 花蓮市中央路三段 703 号  
TEL: 886-40510777 # 4002  
0912-412-600 # 4002

## アメリカ

総支部 (San Dimas)  
TEL: 1-909-4477799  
北カリフォルニア支部  
TEL: 1-408-4576969  
ニューヨーク支部  
(New York)  
TEL: 1-718-8880866

## 香港

TEL: 852-28937166  
フィリピン Manila  
TEL: 63-2-7320001  
タイ Bangkok  
TEL: 66-2-3281161-3

花蓮慈済医学センター  
970 花蓮市中央路三段 707 号  
TEL: 886-3-8561825

玉里慈済病院  
981 花蓮県玉里鎮民権街 1-1 号  
TEL: 886-3-8882718

関山慈済病院  
956 台東県関山镇和平路 125-5 号  
TEL: 886-89-814880

大林慈済病院  
622 嘉義県大林鎮民生路 2 号  
TEL: 886-5-2648000

台北慈済病院  
231 新北市新店区建国路 289 号  
TEL: 886-2-66289779

台中慈済病院  
427 台中市潭子区豊興路一段 88 号  
TEL: 886-4-36060666

斗六慈済病院  
640 雲林県斗六市雲林路2段248号  
TEL: 886-5-5372000

慈済大学  
970 花蓮市中央路三段 701 号  
TEL: 886-3-8565301

台北支部 (新店静思堂)  
231 新北市新店区建国路 279 号  
TEL: 886-2-22187770

慈済人文志業センター  
112 台北市立德路 8 号  
大愛テレビ局  
TEL: 886-2-28989000

静思人文  
TEL: 886-2-28989888

カナダ Vancouver  
TEL: 1-604-2667699

メキシコ Mexicali  
TEL: 1-760-7688998

ドミニカ Santo Domingo  
TEL: 1-809-5300972

ブラジル Sao Paulo  
TEL: 55-11-55394091

イギリス London  
TEL: 44-20-88699864

フランス Paris  
TEL: 33-1-45860312

ドイツ Hamburg  
TEL: 49 (40) 388439

オランダ Amsterdam  
TEL: 31-629-577511

スウェーデン Goteborg  
TEL: 46-31-227883

オーストリア Vienna  
TEL: 43-1-7346988

南アフリカ Gauteng  
TEL: 27-11-4503365

中国蘇州  
TEL: 86-512-80990980

ベトナム Hochiminh  
TEL: 84-8-38535001

ミャンマー Yangon  
TEL: 95-1-541494

マレーシア  
セラランゴール支部 KL  
TEL: 603-62563800

ペナン支部 Penang  
TEL: 604-2281013

シンガポール  
TEL: 65-65829958

インドネシア Jakarta  
TEL: 62-21-5055999  
大愛テレビ局  
TEL: 62-21-50558889

スリランカ Hambantota  
TEL: 94 (0) 472256422

ヨルダン Amman  
TEL: 962-6-5817305

トルコ Istanbul  
TEL: 90-212-4225802

オーストラリア Sydney  
TEL: 61-2-98747666

ニュージーランド  
Auckland  
TEL: 64-9-2716976

# 慈済

2024年10月18日発行・334号  
中華郵政台北誌字第909號執照登記為雜誌交寄  
Printed In Taiwan

発行人 釋證嚴

発行所 慈済伝播人文志業基金会

〒112 台湾台北市北投区立德路8号

編集 慈済日本語翻訳チーム

杜張瑤珍・陳植英・黒川章子・王麗雪

電話 (886)02-2898-9000

FAX (886)02-2898-9994

E-mail: 021620@daaitv.com

慈済基金会日本支部

〒169-0072 東京都新宿区大久保 1-2-16

電話 (03)3203-5651 ~ 5653

FAX (03)3203-5674

E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw

tzuchi@tzuchi.jp

證嚴法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈済に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本語への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示をいただければ幸いです。(日文組編集同人)



## 能登に気を掛け、お互いに祝福し合う

7月中旬に慈濟は、能登半島地震の被災地である志賀町と震源地に近い珠洲市で「お見舞金」を配付した。慈濟基金会顔博文執行長（右から2人目）はボランティアと共に受け取りに来た人に関心を寄せた。

2カ月間で4回実施された配付活動は円満に終了し、震災後の復興を心配しながら半年間を過ごしてきた1万世帯余りの住民に、支援が行き渡った。多くの住民が台湾の花蓮で発生した地震の影響を心配する中、慈濟が約束通り支援に来たことにいっそう感銘を受け、お互いの平穩無事を祈り合った。



慈濟日本サイト



慈濟ものがたり